

野鳥だより

—北海道—

ISSN 0910-2396

北海道野鳥だより第214号

編集・発行 北海道野鳥愛護会

発行年月日 2023年12月21日

オオルリの若鳥



2023.9.29 札幌市北区

撮影者 辰 巳 研 一 (札幌市北区)



も く じ

謎多きハリオアマツバメの生態に迫る

酪農学園大学准教授 森 さやか	2
母を亡くしたオシドリが飛ぶまで 北大2023年夏	
札幌市北区 フリーライター 小野 高秀	4
【私の探鳥地】ヨコスト湿原 (胆振管内白老町)	
渡り鳥が行き交う海岸線の小さな湿原 登別市 山地みのり	6
【バードウォッチャーズ・スケッチブック】	
鶯は(今日も)舞い降りた オオワシ、オジロワシ	
札幌市中央区 本間 康裕	8
【野鳥情報コーナー】	
6月の石狩市 アカハラダカを観察 札幌市西区 北山 政人	10
日高・様似町 ナベヅルとカナダヅル飛来 浦河探鳥クラブ 武内 秀仁	10
探鳥会ほうこく	11
会員一筆 庭の木槿 ヒヨドリ4羽巣立つ 札幌市南区 大和谷正人	15
探鳥会あんない/鳥民だより/表紙の鳥	16

※本誌に掲載する写真のカラー版は、当会ホームページ(<https://aigokai.org>)で閲覧することができます。

謎多きハリオアマツバメの生態に迫る

酪農学園大学准教授 森 さやか

私は2015年からハリオアマツバメの繁殖生態と渡りの研究に取り組んできました。本種はその生態がほとんど謎に包まれていましたが、私たち研究グループによって繁殖生態について様々なことが明らかになりつつあり、越冬地や渡り経路を明らかにすることができました。それらの研究の背景や成果、今後の展望についてご紹介したいと思います。

ハリオアマツバメ (*Hirundapus caudacutus*) は、体長約20cm、体重約120gの小鳥ですが、鎌形に尖った細長い翼を広げると約50cmにもなります。日本では本州中部以北に渡来する夏鳥で、主な渡来地は北海道です。日本に渡来する亜種 (*H. c. caudacutus*) はシベリア中部から日本にかけての範囲で繁殖し、パプアニューギニア南部からオーストラリア東部で越冬しています。



ハリオアマツバメ 2023.5.30 十勝管内 米川 洋さん撮影

本種は世界最速の時速170kmで水平飛行できる鳥と広く信じられていますが、この値はいつどのように計測さ

れたものかわかっていません。いずれにしても、シューッと音を立てて空を切り、かなり高速で飛んでいることは間違いありません。本種を含むアマツバメ類は空中生活に特化しており、なかでもヨーロッパアマツバメ (*Apus apus*) は交尾や睡眠も飛びながらおこない、繁殖期に巣にとまるとき以外はほぼ一年中飛んでいることで有名です。ハリオアマツバメも同様であると信じている方が多いですが、実際には夜間は巣穴も含めた樹洞や、樹木の群葉内の小枝、幹などにとまって休息しているようです。また、私たちは巣内で交尾していることも確認しています。このことは空中での交尾を否定するものではないですが、空中での交尾の確実な証拠もまだないようです。

＜大きな樹洞で産卵、子育て＞

本種は非常に大きな樹洞の中で繁殖します。共同研究者の米川洋さんの調査によると、巣の底面の大きさは縦横30cm四方以上と広く、深さは1.5~8.7mにおよびます。ただし、巣口の大きさはクマゲラの巣口程度のものから、大きく開口しているものまでさまざまです。本種の巣を発見することは極めて難しいです。なぜなら、帰巢時はあまり減速せずにすばやく巣穴に飛び込み、出巢時も巣から飛び出すなり急加速して飛び去ってしまうからです。しかも帰巢頻度が非常に低く、両親合わせて1日10回以上帰巢することはまれなのです。1つの樹洞には1つがい営巣し、巣材を用いた造巣はせず、樹洞の底の堆積物に浅く産座を掘って直接卵を産みます。ところが図鑑などでは「枯れ草などの巣材を唾液を固めて営巣」、「日本では崖でも繁殖」という説明がされています。国外では樹洞以外の巣の報告はなく、国内の崖での繁殖は100年以上前の日光の華嚴の滝での報告1件しかありませ

ん (Le Souéf 1907)。当時そこには多くのアマツバメとハリオアマツバメが飛び交っており、著者は夕方近くに岩壁上に泥でつくられた巣でのハリオアマツバメの育雛行動を140mほど離れた場所から双眼鏡で観察したとあります。しかし、当時の双眼鏡の性能がいかほどのものであったのでしょうか？ 私の知る限り、これ以外に崖での繁殖や巣材を用いた巣の報告はありません。

<生息数が激減～巣箱を開発して研究、種の保全へ>

以上に述べてきたように、空中を高速で飛び続け、巣の発見も困難とあれば、広い地域で普通種であるのに生態がほとんど謎のままだったこともうなずけるでしょう。しかし実は、本種の個体数は激減していることが近年明らかになってきました。越冬地のオーストラリアでは1950年代以降に個体数が80%減少し (Tarburton 2021)、日本でも全国調査で1970年代から現在までに記録地点数も個体数も急減しつつあります (植田・植村 2021)。しかし越冬地の環境には大きな変化はないため、個体数激減の原因は繁殖地の環境悪化にある可能性が高く、渡り経路の環境も悪化しているかもしれません。本種はオーストラリアではすでに危急種とされており、日本でも絶滅危惧種とすることが検討されています。したがって、ハリオアマツバメの基礎生態や渡りの謎の研究は、いまや学術的な関心からだけでなく、種の保全の観点からも必要とされています。

私たちはハリオアマツバメの繁殖数を増やし、繁殖行動の観察や捕獲調査を実現するために大きな巣箱を開発しました。巣箱の架設は保全にも生態研究にも非常に有効な方法ですが、適切に架設しないと生存率や繁殖成功率が下がったりするなどの悪影響が生じます。私たちは長年複数の自然巣がある好適な繁殖環境に巣箱を架設し、近年激増している外来種のアライグマによる捕食を徹底的に予防しています。2017年から毎年10個の巣箱を架設したところ、毎年ほぼすべての巣箱が利用され、調査地で観察される個体数はかつての3倍ほどに増えました。巣箱の天井には監視カメラを設置して繁殖生態を調査しています。また、親も雛も捕獲して標識によって個体識別し、雛への給餌物を調査したり、配偶様式の調査などのためのDNAサンプルも採集しています。

<明らかになった「8の字」の渡り経路>

繁殖個体の一部には移動記録装置も装着し、繁殖地での行動圏利用や渡りの調査も進めています。まだここで詳細をご紹介できないことが多いのですが、渡りについては2021年に第1報となる論文を公表しましたのでご紹介します (Yamaguchi et al. 2021)。

繁殖個体に0.7gと超小型の移動記録装置であるジオロケータをリュックサックのように背中に背負わせて放鳥し、翌年も繁殖地に帰ってきた個体から装置を回収して解析し、本種の越冬地と渡り経路を初めて明らかにすることに成功しました。ジオロケータには光センサーと時計が搭載されており、日出と日没の時刻が記録されま

す。そのデータから毎日の緯度・経度を大雑把に算出できるので、渡りの経路を推定できます。調査方法の試行錯誤を重ね、論文で公表した3個体のデータを回収できるまでに5年かかりました。



「8の字」の渡り経路図

渡り経路を図に示しましたが、十勝のハリオアマツバメは、8～9月に繁殖を終えると秋の渡りを始め、一度太平洋を大きく南下した後、なぜか再び北上して朝鮮半島から中国大陆を通して南下し、台湾とフィリピンの間のルソン海峡付近から再び太平洋に出てさらに南下し、11月にはオーストラリア東岸のブリスベン周辺に到達しました。その後、オーストラリア東部を広く利用して過ごし、3月下旬～4月になるとオーストラリア内陸部を北西に移動し、スンダ列島やボルネオ島を通過して南シナ海の洋上に出たあと北東に進路を変え、南西諸島から本州沿いに北上して4月下旬～5月に北海道に戻ってきていました。東アジアからオセアニアにかけて大きく8の字を描くような渡り経路は非常に特殊で、往復の総移動距離は地球1周分に相当する約40,000kmにおよびました。思いもよらない渡り経路がパソコン画面に初めて描き出されたときには、私たちも大変驚き、感激しました。なぜこのような特殊な経路をとるのかは、まだわかりません。追跡事例を増やすとともに飛翔高度などのデータも取得できれば、その謎を解き明かす手がかりになると考えています。

これまでの調査では、渡りだけでなく、繁殖生態にも驚くべき特徴がいくつも見つかっています。今後それらについても詳細を明らかにしていきたいと思っています。

<引用文献>

- Le Souéf (1907) Nesting place of Australian swifts. *Emu* 7:73-74.
- Tarburton, M.K.(2021) Recent increase in knowledge about numbers and flight behaviour in the White-throated Needletail *Hirundapus caudacutus*. *Australian Field Ornith.* 38:124-130.
- 植田陸之・植村慎吾 (2021) 全国鳥類繁殖分布調査報告 日本の鳥の今を描こう 2016-2021年. 鳥類繁殖分布調査会, 府中市.
- Yamaguchi, N. M., Mori, S., Yonekawa, H., Waga, D. & Higuchi, H. (2021) Light-level geolocators reveal that White-throated Needletails (*Hirundapus caudacutus*) follow a figure-eight migration route between Japan and Australia. *Pacific Sci.* 75:75-84.

母を亡くしたオシドリが飛ぶまで 北大2023年夏

札幌市北区 フリーライター 小 野 高 秀



写真1. サクシュコトニ川を下るオシドリ親子。
この時ヒナは7羽 2023.6.15



写真2. 親がカラスに襲われ、ヒナも6羽に
2023.6.22

「おはようございます。何羽いますか？」

「大丈夫。5羽いますよ」

エルムの緑が日増しに色濃くなり、ポプラの綿毛が風に舞う初夏の北大キャンパス（札幌市北区）。朝の散策を楽しむ市民の間では、こんなやり取りが毎日のように交わされていました。

「5羽」とは、北大で孵化し、母鳥がいなくなったのにもかかわらず、天敵のカラスから身を守って自分たちだけで生き延びたオシドリのヒナです。多くの市民がその愛らしく、そして、たくましい姿に目を細め、時にはヒナを狙うカラスとの間に入って、成長ぶりを温かく見守りました。

<ヒナ14羽が5羽に 母鳥も死んで>

197万都市・札幌の中心にありながら、豊かな自然に恵まれ、数多くの野鳥を観察できる北大キャンパス。構内には人工の池があるほか、琴似川に合流するサクシュコトニ川も流れ、オシドリやマガモなどの水鳥も生息します。

このうち、オシドリは2010年ごろから北大で繁殖するようになったといわれ、「オシドリ母さん 街の緑に生きる」と題して2020年1月に放送されたNHK総合テレビの番組「ダーウィンが来た！」を見た方も多いことでしょう。

私がオシドリを観察するようになったこの4、5年は、毎年、何組かがつがいになり、今年は4組が繁殖に成功して、エルムなど広葉樹の樹洞からヒナが巣立ちました。

ただ、カラスやキツネ、あるいは野良猫に襲われて4組中2組のヒナはすぐに全滅。この5羽のヒナも、6月上旬に北大正門近くの百年記念会館周辺の広葉樹から巣立った時は14羽もいたそうですが、次々とカラスにやられたり、落ち葉が流れるのを防ぐため川に張られたネットに絡まったりして、7羽（写真1）に減ってしまったのです。

そして、6月20日ごろには、カラスに襲われたヒナを守ろうとした母鳥がカラスに立ち向かって命を落としました。北大生がその様子を目撃したそうです。ヒナも6羽（写真2、写真3）になりました。

7月初めにはまた、カラスに襲われたのか、6羽いたヒナは5羽（写真4）になってしまいました。



写真3. ヒナ6羽だけでメインストリートを横断 2023.6.22



写真4. 1羽が減り、5羽で体を寄せ合うヒナ 2023.7.3

<亡き母に教わった行動で成長>

5羽がねぐらとしていたのは、工学部と理学部の間にある大野池の水草の茂みか、その横を流れるサクシュコトニ川の茂みの中と推測されていました。ここだと、カラスから身を隠すことができるのでしょう。

一方、ポプラの綿毛の中にある種子やミミズなど餌が豊富なのは、大野池とは北大のメインストリートをはさんで反対側にある弓道場横のサクシュコトニ川周辺です。このため、母鳥が健在だった時から、親子は毎日、餌を求めて早朝に、あるいはねぐらに戻るため夕方に、母鳥を先頭にメインストリートを歩いて横断し、その姿は、北大の初夏の風物詩になっていました。

みなしごになっても、母親に教わったその行動パターンは変わりませんでした。早朝、5羽はメインストリートの手前で、カラスが周辺にいないか、慎重に様子をうかがい、安全だと確認すると、一目散に道路を横断します。

「頑張れよ、ヒナちゃん」「車や自転車にも気をつけてね」

5羽を見守る「オシドリウオッチャー」は次第に増え、ポプラの綿毛がサクシュコトニ川に溜まって5羽が食事にいそむ場所には、カメラやスマホを手にした市民や観光客の人垣ができるほどでした。



写真5. 成長した5羽。慎重にメインストリートを横断 2023.7.13

<リン子親子と鉢合わせも>

今年、北大で育ったオシドリのヒナはもう一組いました。「リン子」の愛称で呼ばれている雌が連れているヒナ7羽です。右脚に足輪（リング）がつけられているからリン子。何年も前から春になると毎年、北大にやってきて、繁殖している「ベテラン母さん」で、今年は6月

上旬に巣立った8羽のうち、7羽を見事に育て上げました。

サクシュコトニ川では、2組が鉢合わせすることがよくありました。リン子は、先に生まれて体が大きい5羽が近づいてくると、自分の子どもたちを守ろうとするのか、5羽に向かって行って、蹴散らします。「仲良くしてあげればいいのに、リン子。あんたは子育てのベテランなんだから」と市民の一人。昨年までは市民に大人気のリン子でしたが、今年はすっかり、悪者になったようです。



写真6. 今年もヒナを育て上げたリン子（右脚にリンク） 2023.6.18

<ついに飛んだ！>

7月も中旬になると、5羽のヒナは羽を広げ、飛ぶ練習を始めるようになりました。体も大きくなり、かち合う成鳥のリン子ともさほど変わりません。そして、25日朝、道路を横断するためにメインストリートにやってきた5羽が、歩くのではなく、それぞれが羽ばたいて道路の向こうに飛んで行く姿を初めて見る事ができました。親がカラスに襲われ、ヒナ5羽だけとなってから20日余り。「親はいなくても、親の教えを守れば、子は育つんだ」とひと安心した瞬間でした。

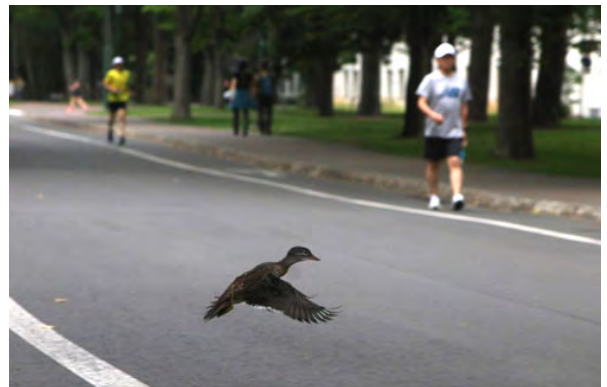


写真7. ついにメインストリートを飛んで横断 2023.7.25

北大を散策する市民の多くは、私を含めて、マガモとオシドリの区別がつかなかったような鳥の素人です。そんな人にも自然界の厳しさと生命力のたくましさを教えてくれた5羽のヒナ。南に向かって旅立ったのか、私の観察では8月中旬には北大キャンパスから姿が見えなくなりましたが、その姿は多くの市民の心に刻み込まれたことでしょう。そして、5羽を見守り続けたことで、いつの間にか育まれた見知らぬ人同士の連帯感も、いい思い出となった2023年北大の夏でした。

私の探鳥地 ヨコスト湿原 (胆振管内白老町)

渡り鳥が行き交う海岸線の小さな湿原

登別市 山 地 みのり



写真1. オジロワシ 2022.12.26

<国道近くの秘密めいた湿原>

ヨコスト湿原は胆振管内白老町の太平洋岸沿いにある33haの低層湿原です。『空からみえる海岸線は渡り鳥にとっての道』と、ある方から教えられた時に、一番に頭に浮かんだ場所がヨコスト湿原でした。たとえば空を飛ぶオジロワシ(写真1)の目になってみると、ここはまさしく、その道の延長上にあります。

初夏にはヒバリ、オオジシギ(写真2)、オオヨシキリ、コヨシキリ、ノビタキ、オオジュリン、ホオアカ、シマセンニュウなどが繁殖のために渡ってきます。

渡りの道にある湿原なので、実に様々な野鳥がやってきます。時には渡りの途中で珍鳥が舞い降りてきてくれて、バーダーを楽しませてくれる、そんな湿原です。



写真2. オオジシギ 2023.6.12

しかし、人間がここに行く方法は国道36号を室蘭方向に向かい手作りのヨコスト湿原の看板が入口(図1)にあるので、それを目印にして左に曲がるしか方法はありません。初めて訪れる人には、入り口は目立たなくて秘密めいた場所なのです。

<冬の湿原は猛禽が楽しみ>

個人的には雪が積もる前の寒い時期、コミミズクがここに来てくれるのを楽しみにしています。



図1. ヨコスト湿原ルート

私は苫小牧方面からの登別へ帰宅途中、時間があれば必ずヨコスト湿原で休息することになっています。猛吹雪の悪天候のある日、湿原の入り口の坂道にある杭にコミ



ミズク(写真3)がいて、まるで笠地藏のように頭にたくさんの雪をのせた姿で出迎えてくれたことがありました。

とても幻想的な光景にうっとりとする時間でした。

写真3. 笠地藏のようなコミミズク
2020.2.16

そして、ある日は暗くなり誰もいなくなった湿原で携帯電話を見ていたら、気がつくとコミミズクが車のすぐ横の杭にいて、私の行動をのぞき見していました。もしかしてこれは“コミミズクの人間ウォッチング??”。いつもとは逆、コミミズクが人に近寄ってきて私を観察!? 可愛い瞳で、私をのぞき見をしているその仕草に驚き、微笑み、うれしく感じた思い出となりました。

写真4の個体の時は、車中で出現を待っていたら、どこに隠れていたのか、とことこ歩いてやって来ました。そして軽快に小走りして、ハマナスのトゲトゲの茂みに入り、おさまりました。私に気づいたのか、見慣れた丸い顔から耳をツノ出して威嚇するような怖い表情に。可愛い“コミミちゃん”も猛禽なんだなあ～って感じるひと時でした。



写真4. 近づいてきたコミミズク 2021.1.27



写真5. ハイイロチュウヒ 2023.1.13

冬の立ち枯れた湿原。コミミズクのほかに、空にはオジロワシ（写真1）が舞い、海岸沿いに獲物を探すのか、時々ハイイロチュウヒ（写真5）も現れます。優雅に飛ぶ姿は何度見ても素敵ですね。

オオタカ（写真6）が湿原に現れると、探鳥している側としてはうれしくなりますが、そうとばかりも言えないことがあります。

雪解けまもない、まだ芽吹いていない湿原。ツグミがハマナスの茂みの中で、餌を探していた時のことです。双眼鏡の中のツグミが消え、目の前が真っ黒になりました。ツグミがオオタカに捕食された瞬間でした。

オオタカが出るようになると、コミミズクは姿を現さなくなります。オオタカは天敵なのか、大好きなコミミズクが見られなくなりますので、私にとっては残念なことでもあります。



写真6. オオタカ 2020.4.12

＜厳冬期にクイナも＞

湿原には大きな池や水路がありますので オオハクチョウ、マガン、シジュウカラガンをはじめとする大型のガンカモ類が越冬にやってきます。海上に目を転じると、シノリガモ、クロガモ、カンムリカイツブリなど、たくさんさんの海鳥も観察できます。

通い続けていると、思わぬ出会いもあります。厳冬期の2月にクイナ（写真7）が水たまりにいたのでビックリしました。お互いに驚いたので、一度は逃げられ、いったんその場を離れました。その後、再び見つけた場所に戻り10分ほど待っていると、現れてくれました。しばらく観察していると、仲間と鳴き交わすような声も聞こえました。北海道では夏鳥だと思っていたクイナが厳冬期のヨコスト湿原にいたことに大変驚きました。



写真7. 厳冬期に見つけたクイナ 2020.2.18

＜湿原に包み込まれるような感動＞

白老町のパンフレット（2021年3月発行）によると、ヨコスト湿原には海浜、海岸草原、湿地に適応した463種の植物と64種の野鳥が生息しています。2016年に環境省の「日本の重要湿地」に指定されています。しらおいファンクラブのホームページによると、地名はアイヌ語の「ヨコ・ウシ・ト（獲物のたくさんある沼）」が語源のようです。

私が初めてここを訪れた2014年の秋、湿原にはたくさんさんのアオサギがいて、遠くには樽前山の姿がありました。波音がして、振り返ると海岸がある…。特別な風景の中に包まれているような感動がありました。それ以来、ここは私にとって大切な癒しの場所になりました。国道沿いに遺されたこの貴重な環境が末永く続くよう願っています。

バードウォッチャーズ・スケッチブック

鷲は(今日も)舞い降りた オオワシ、オジロワシ

札幌市中央区 本間 康裕

<ドイツ軍作戦暗号に秘められた鷲>

英国ノーフォークの寒村にある教会の墓地を訪れた作家は、そこでドイツ軍兵士の隠された墓碑銘を発見する。英国で死んだドイツ兵はすべて別な場所に埋葬されているはず。なぜ、ここに？ 謎を追って、話は第2次大戦中にさかのぼる――

という設定で始まるのがジャック・ヒギンズの戦争冒険小説「鷲は舞い降りた」です。ドイツ空軍降下猟兵（猟兵とは小部隊の歩兵のこと。転じて特殊部隊を指す）による、英首相チャーチル拉致作戦と、その敗北するさまを描いた小説は1975年の発表当時としては珍しく、これまで敵役だったドイツ軍兵士を主役にし、人間的に描くことで、戦争の無意味さをかえってあからさまにしてベストセラーになり、映画化もされました。「鷲は舞い降りた」というのはノーフォークへの落下傘降下成功をナチ親衛隊長官に告げる暗号「The eagle has landed」のことで、この暗号がそのまま原題になっています。



オオワシ 2023.3.25 石狩湾新港

もちろん、面白い話なのですが、バードウォッチャーとして魅力を感じるのは、題名にワシが登場するだけではありません。冒頭からミヤマガラスが現れたり（鳥に興味がない人はミヤマガラスなんて知らないだろうな）、ドイツ軍兵士の中にバードウォッチングを趣味にする兵長がいて、作戦中に沼地でダイシャクシギ、ヒドリガモ、コクガンを見つけ、さらに「これは面白い。クサシギだ」と叫んだり…と楽しみどころ満載なのです。また舞台となるノーフォークといえば、湿地帯に保護区を設けて野鳥の生息地としたミンズミア（ハーバート・アクセル著 黒沢令子訳「よみがえった野鳥の楽園」に詳しい）の所在地じゃありませんか！

と、大いに脱線して書き始めましたが、今回取り上げるオオワシはカムチャツカからオホーツク沿岸に分布し、冬には北海道にやってきます。なので、「鷲は舞い降りた」のワシはオオワシではないのです。けれどヨーロッパにいないので、欧米の愛好家がぜひ見たいと願う鳥でもあります。多くのイーグル・マニアが冬の道東を訪れるのだそうです。

以前、道東で自然ガイドをしている方のコラムを新聞で読んだことがあります。海外客のお目当ては、やはりオオワシで、それが現れて近くに止まるとガイド氏が「The eagle has landed!」と叫ぶんだそうです。そうすると英語圏からの客は「Oh!」とわくのどとか。これは念願のオオワシを観察できた喜びとともに、小説の題名を思い出すからですね。

<探検家ステラーが見つけたオオワシ>

さて、欧州、大西洋にはいないオオワシですが、ドイツとは少なからぬ縁があります。それは英名を見るとわかります。Steller's Sea Eagle、つまりステラー海鷲。「あれ、どこかで聞いたような」と感じた方は、かなりの動物マニアです。そうステラー海牛（ステラーカイギュウ）という巨大なカイギュウ類が北の海にいて、すでに絶滅したという話をご存じの方も多いでしょう。このカイギュウを発見し、オオワシも見つけて報告したのがステラーというドイツ人なのです。

ゲオルク・ヴィルヘルム・ステラー（1709年～46年）は、ヴィトウス・ベーリングという人の指揮のもと、アジアとアメリカが陸続きかどうかを調べるため、カムチャツカ半島の東の海を探検したのです。というとこれはドイツの探検隊かということ、そうではなく、ベーリングはデンマーク人で、ロシアのピョートル大帝が抜擢した海軍将校でした。そのころロシアには優秀な船乗りがいないため、外国人を雇っていたのです。ベーリングはロシア海軍勤務中には対スウェーデン戦争で実戦も経験したそうです。

以下、ロバート・シルヴァーバーグ著 佐藤高子訳「地上から消えた動物」（ハヤカワ文庫）をつまみ食いすると…医師であり、植物学者、動物学者のステラーは船医として探検に参加したのですが、航海は苦難の連続で、隊長のベーリングは死亡（ビタミン不足なんだろうな）、2人の副長も病に倒れ、ついにステラーが指揮をとることになりました。ステラーは難破して島に打ち上げられた船の部材を組み立て直して作った船でカムチャツカ半島に戻り、アラスカの発見（つまりアジアとアメリ

カは海に隔てられていた。そこでベーリング海と名付けられたんだな) やカイギュウ、オオワシの発見を報告したのです。

英名はこのステラーの名がついているのですが、学名は *Haliaeetus pelagicus* です。 *Haliaeetus* とはギリシャ語の halos 海 + aetas 鷲 (ギリシャ文字をローマ字に書き換えています)。 *pelagicus* はラテン語で外洋の～という意味で、まさにオホーツク海を渡ってくる外洋の海ワシにぴったりです。

Haliaeetus はオジロワシ属の属名です。ここでオオワシと同じ属のオジロワシについても書いておきましょう。学名は *Haliaeetus albicilla* です。 *albicilla* とはラテン語で白い尾。英名も White-tailed Eagle で和名同様白い尾の鷲、いずれもわかりやすいですなあ。

札幌周辺ではオオワシよりオジロワシのほうがずっと見る機会が多い鳥です。オジロワシの絵は2023年2月28日に千歳市のサーモンパークの公園で見たもの。ハシブトガラスが大騒ぎして、観光客も「あれ、あれ!」と言いながらカメラを構えているので、木の中を見ると、2羽のオジロワシが止まっていて、1羽はカモか何か水鳥らしきものをつかんでいるのです(捕ったものか、へい死体をひろったものか?)。それを狙ってハシブトガラスが大挙して集まっているのですが、構わずに悠然としていました。あまり邪魔をしてはいかんとし、写真を撮ってそうそうに引き上げました(残念! 尾の白いところが木に隠れていた)。でも、サーモンパークといえは千歳市の真ん中。こんなところにもいるんだと驚きました。



オジロワシ 2023.2.28 サーモンパーク (千歳市)

一方、オオワシの方は春になるといなくなってしまう(カムチャツカ方面に帰ってしまう)ので、札幌近郊ではなおさら、見る機会が少ないのです。本当かどうか知りませんが、石狩川に沿って移動しているという話があるのですが、なかなか出あえません。オオワシの絵はいずれも2023年3月25日に石狩湾新港(東港)上空に飛来したものです。オオワシは尾と肩が白いのが特徴ですが、この個体は肩が白くなく、おそらくまだ若いのでしょう。でも大きなオレンジ色の嘴で、なんとか識別できました。空高く帆翔し、旋回中に左翼端がめくれました。

この石狩湾新港と石狩川の距離は最短で約3.5km。新港にそそぐ石狩放水路を石狩川の支流である茨戸川のつながりとみなせば、石狩川沿いで観察したということになりましょう。



オオワシ 2023.3.25 石狩湾新港

<月、ゴルフ場、基地に舞い降りる>

話は「鷲は舞い降りた」に戻りますが、「The eagle has landed」というのは、ジャック・ヒギンズが初めて使った言葉ではないのです。1969年、アポロ11号の月面着陸船が人類初の地球外天体到達を成し遂げた際の通信が「The Eagle has landed」でした。着陸船の名称がイーグルだったので、これは「イーグル号が(月面に)着陸した」という意味ですね。イーグル号の記事を写真で見る限り、このイーグルはどうもアメリカ国章のハクトウワシのようです。

さらに作家、佐々木譲さんは「鷲は舞い降りた 完全版 菊池光記」(ハヤカワ文庫)の解説で1983年、ハワイアン・オープン・ゴルフの最終日第18ホールで青木功がイーグルショットを決めて逆転優勝した翌日の地元紙の見出しが「イーグル・ハズ・ランデッド!」だったと書いています。「(パーより2打少ない)イーグルショットが突然やって来た」と訳せばいいかもしれません。もちろん「鷲は舞い降りた」を意識した見出しではあります。

ところで、2023年2月28日にサーモンパークでオジロワシを観察していた時のことです。頭上に航空自衛隊のF-15ジェット戦闘機が低空侵入してきました。そのまま降下を続け、機体が視界から消えました。新千歳空港(この場合は千歳基地と書いた方がいいのかな)のあたりに到達したと思われるころ、私も「The Eagle has landed」とつぶやいたのでした(F-15の愛称は「イーグル」)。

というわけで今日も航空自衛隊基地やら各地のゴルフ場で鷲は舞い降りているようです。

(イラスト筆者)

野鳥 情報コーナー

6月の石狩市 アカハラダカを観察

札幌市西区 北山 政人



アカハラダカ 2023.6.10 石狩市厚田区

2023年6月10日、石狩市厚田区嶺泊の山中にてアカハラダカを観察し、写真を撮ることができました。観察した場所は見通しの良い山の上です。森林の中に廃業した牧場の荒れた放牧地や牧草地が点在する環境です。天候は曇りでやや風が強い状況のなか、午前9時40分ごろ、アカハラダカは北の方角から飛んできて、そのまま東側の内陸の方へ飛び去りました。わずかな出会いの時間、かなりの距離もありましたが、カメラのシャッターを切ることができ、画像を拡大すると、アカハラダカであることが確認できました。

見た瞬間、青灰色の頭部、黄色の虹彩、胸に赤味が強いので、雌の成鳥と考えました。しかし、撮れた写真をその場で見返すと、初列風切の外側が成鳥の特徴である黒色ではなく、太い横斑が残り、翼上面も茶色の幼羽が多く残っていることが確認できました。第1回夏羽に移行中の、昨年生まれの幼鳥と思われます。

アカハラダカは中国北東部、朝鮮半島、ロシア極東ウスリー南部で繁殖、冬は中国南東部、フィリピン、インドネシア、マレー半島などで越冬します。日本では春と秋の渡りに見られる旅鳥で、特に秋に対馬、九州西部や南西諸島の中継地では朝鮮半島経由で大群が通過して行きます。本州、四国でも渡りの時期に記録があります。北海道でも時折、記録があり、私自身も2014年9月15日に室蘭市の測量山で雌と思われる個体を撮影しています。

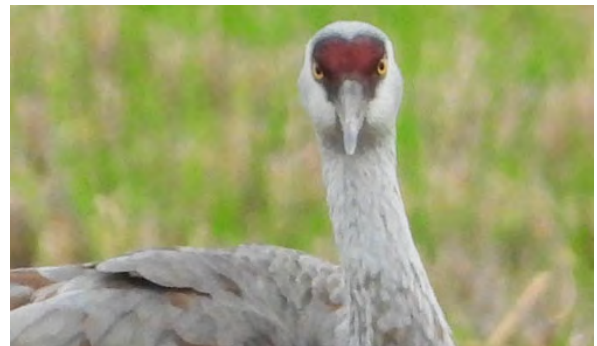
前記した日本の中継地でも春の渡りは個体数が少なく、まだルートがよく分かっていないようです。この全長約30cmの小型のタカを初夏6月の日本海側・石狩地方で観察することは珍しく、出会えたことはとても感慨深いです。

日高・様似町 ナベヅルとカナダヅル飛来

浦河探鳥クラブ 武内 秀仁



ナベヅル(左)とカナダヅル 2023.9.30 日高管内様似町



カナダヅル 2023.9.30 日高管内様似町

2023年9月30日、日高管内様似町の田んぼに、ナベヅル1羽とカナダヅル2羽と一緒に降りていました。発見者は浦河探鳥クラブ会員の深澤敬さんと妻の優子さん。野鳥調査中に見つけ、100mほど離れた町道から観察しました。

1羽はナベヅルであることがすぐに分かりましたが、当地では見たことのない2羽のツルについては、最初はナベヅルの幼鳥かもと推測しましたが、カナダヅルだろうということで、クラブ事務局の私に連絡がありました。合流して、図鑑と照合すると、やはりカナダヅルでした。北米大陸北部やシベリア東北部で繁殖し、メキシコやキューバなどで越冬します。越冬地では乾いた土地にすることが多く、英名はSandhill Craneです。

浦河野鳥クラブの記録として、ナベヅルは2021年5月23日～25日に今回と同じく様似町で確認されていますが、カナダヅルは2001年に当クラブが発足して以来、初めての確認です。正面を向いた時の顔の赤いハートマークが可愛く見えました。3羽は落ち穂などを食べていましたが、10月2日にいなくなり、3日間の滞在でした。



シギ・チドリの仲間、宮島沼のガン、室蘭のタカの渡りなど、この時期らしい探鳥会を大勢の参加者で楽しみました。9月10日、10月8日、11月5日の野幌森林公園はヒグマ出没のため中止しました。

石狩川河口

2023. 8.20

札幌市白石区 飯泉 真菜



トウネン 市橋栄二さん撮影

本格的に鳥見を始めたくて観察会を調べていたところ、ちょうどこちらの探鳥会を見つけました。

ウミウとカワウの違いや、オオセグロカモメとウミネコの違いをベテランの方が丁寧に教えてくださったので、少し鳥が見分けられるようになってうれしかったです。成鳥・幼鳥のトウネン3羽がまるで家族のように一緒にいるのが見られて最高でした。小さな身体でちょこちょこ歩くのが可愛かったです。

ホオアカがいたのですが、私は見つけられなかったので、今度チャレンジしたいなと思います。



ウミウ 市橋栄二さん撮影

子供向けに望遠鏡を低くして探鳥を勧めたり、「こっちの望遠鏡で今カンムリカイツブリ見られるよ!」と掛け合いがあったりと、鳥を通じて親睦を深められる、仲良く楽しめる探鳥会だったと感じました。

探鳥会HPにはバスなどの交通機関での行き方も詳しく書かれておりましたので、車がない私には助かりました。当日朝は雨が降っており中止になるかと思っていましたが、想像以上に多くの参加者が集まってきて、「皆さん鳥が好きなんだな」とうれしく思いました。初心者からベテランまで、大人子供和気あいあいとした雰囲気がとても心地よかったです。これからも探鳥会に参加していきたいと思います。

【記録された鳥】カンムリカイツブリ、カワウ、ウミウ、アオサギ、イソシギ、トウネン、ウミネコ、オオセグロカモメ、トビ、オジロワシ、ハシボソガラス、ヒガラ、ノビタキ、スズメ、カワラヒワ、ホオアカ

以上16種

【参加者】飯泉真菜、石塚 肇・鈴子、板谷輝美、市川恵子、市橋栄二、臼田 正、北山政人、國本昌秀、小坂健介・由佳・優馬・結穂、小島俊幸、小林敦実・恵、小林麻希・蒼都、新城 久、竹田芳範、田原哲也・美幸、辻 雅司、畑 正輔、早坂泰夫、樋口孝城、丸勢文現・亜希子、武藤幹太・大翔、横地治雄、吉永和世

以上32名

【担当幹事】臼田 正、新城 久

鵲川河口

2023. 8.27

日高管内新冠町 五十嵐 千佳

初めて北海道野鳥愛護会の探鳥会に参加させていただきました。普段、野鳥観察はご近所の仲間と情報交換しながら行っていますが、しっかりとした組織の探鳥会に参加したことはなく、今回一緒に歩いた4人はとても楽しみにしていました。



ショウドウツバメ 高島 均さん撮影

四季の館を出発して国道を渡り、まもなくするとスズメの幼鳥に出会えました。嘴の横がまだ黄色いスズメでした。その後、頭上にたくさんのショウドウツバメが飛んで

きました。ショウドウツバメは、低く飛んでくれたので胸の横帯もよく見えました。この日の天候は曇り時々晴れでしたが、雨が降ってくる予報でしたので、「ツバメが低く飛ぶと雨が降る」は当たっていると思いました。

今度は湿地の遠いところにダイサギが見えました。この日はダイサギをたくさん観察することができました。望遠鏡で見せていただくと、口角が目の後ろまで伸びているのがきれいにはっきりと見えて、感動しました。アオサギも姿を見せてくれました。さらに歩いて行くと、20羽以上のウが大群で海の方へ飛んでいくのが見えました。浜辺にたくさん集まっていることを期待しながら先を急ぎました。途中、ノビタキが遊歩道を右へ左へと横切っていました。ノビタキを観察して、しばらく歩くと浜辺の見える所へ到着しました。

浜辺を観察すると、カワウ、ウミウ、オオセグロカモメ、ウミネコがいました。目的の一つであったシギ・チドリは残念ながら観察することができませんでした。かつては干潟がたくさんあって、シギ・チドリの種類も豊富だったというお話を聞き、野鳥を取り巻く環境は変わってきていることを改めて感じました。

今年の夏は暑すぎて、野鳥観察に行けない日が多かったのですが、久しぶりにゆっくりと観察することができて、とても楽しい時間を過ごさせていただきました。



ダイサギ 野田博子さん撮影

【記録された鳥】 マガモ、カルガモ、キジバト、カワウ、ウミウ、アオサギ、ダイサギ、ウミネコ、オオセグロカモメ、トビ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ショウドウツバメ、コヨシキリ、ノビタキ、スズメ、カワラヒワ、カワラバト（ドバト） 以上18種

【参加者】 五十嵐千佳、石田清美、石塚 肇、白田 正、太田裕子、大橋路子、門村徳男、川端 純、北山政人、草間峰子、國本昌秀、斉藤武志、佐藤伸善、佐藤涼子、高沢理一・淳子、高島 均、田中紀文・佳子、田原哲也・美幸、千坂昌史、辻 雅司・方子、中村 忍、野田博子、早坂泰夫、平澤路生、鷺田善幸 以上29名

【担当幹事】 北山政人、門村徳男

い し か り 調 整 池

2023. 9. 3

札幌市北区 小林 恵

去年に引き続き、この日も天気の良い探鳥会となりました。いきなり、ハイタカのデモンストレーション、調整池にいるシギ・チドリに緊張も走ったでしょうか。

アオサギやダイサギがたくさんいました。スタッフの方の望遠鏡でダイサギとチュウサギの違いを教えてもらい、チュウサギを確認できました。

この後、「ウォーリーを探せ!」ではありませんが、土と草に紛れているタシギ、ヒバリシギは見つけるまで大変でした。見つけてくれた方には感謝するとともに、忍者さながらの鳥に脱帽です。



タシギ 筆者撮影



ヒバリシギ 早坂泰夫さん撮影

東側の干潟エリアには、イソシギ、タカブシギ、トウネンがいました。おしまいに、ダイサギのそばでキンクロハジロ1羽を見ました。9月に入り、子育てを終えたシギ・チドリたちが、次々と中継地に来てくれて、うれしく思います。秋は台風の多いシーズンです。心配はつきませんが、お腹いっぱい食べて、無事越冬先に帰ってもらい、来年、家族・親戚・友人いっぱい連れて、元気な姿を見せてもらえたらと願っています。

【記録された鳥】キンクロハジロ、キジバト、アオサギ、ダイサギ、チュウサギ、タシギ、タカブシギ、イソシギ、トウネン、ヒバリシギ、トビ、オジロワシ、ハイタカ、オオタカ、アカゲラ、ハヤブサ、ハシブトガラス、シジュウカラ、コムクドリ、ハクセキレイ、カワラヒワ、ベニマシコ 以上22種

【参加者】阿部真美、荒木良一、池田紀美江、池田光優、今村三枝子、臼田 正、内山英晋、北山政人、木下由美子・茜、國本昌秀、栗林宏三、小島俊幸、小林 恵、齊藤潤太郎・律子、坂口俊人、佐川健次、佐藤直記・博子、佐野純子、杉山次郎、高島 均、高橋きよ子、辰巳研一、田中 陽・雅子、田原哲也・美幸、辻 雅司、鳥谷峰 修・心、中田勝義、中村 隆、畑 正輔、浜野チエ子、早坂泰夫、樋口孝城、平澤路生、本間康裕、道川富美子、三輪節子、武藤幹太・大翔、横地治雄、吉田慶子 以上46名

【担当幹事】樋口孝城、道川富美子

宮 島 沼

2023. 9.24

札幌市中央区 國本 昌秀



羽ばたく亜種オオヒシクイとマガンの群れ 筆者撮影

国際的に重要な湿地として、2002年11月にラムサール条約に登録された宮島沼。秋晴れのもと、キャハン、キャハンというマガンの鳴き声も賑やかです。

観察地点近くの水辺には、カイツブリとオオバンが行き来し、遠くにはカンムリカイツブリも餌を捕っていました。対岸にいたダイサギが近くの水辺に飛来すると、青い空、青い水面に優雅な白い姿が鮮やかに映えました。カモの群れの中には、換羽期のミコアイサとヨシガモも交っていました。

岸辺のヨシ原から「クッ クッ」と聞きなれない鳥の鳴き声が聞こえました。いろいろ談義の結果、姿は見えないもののクイナの鳴き声でした。

今年の初雁は、宮島沼水鳥・湿地センター長の牛山克巳さんによると、例年より遅い20日の200羽ほどで、探鳥会

前日(23日)のねぐら入りは3000羽だったそうです。そのマガンの群れは私たちから相応の距離を保って沼に拡がり、その手前に亜種オオヒシクイが、野太くグワン、グワンと鳴いていました。太くて黒い嘴も印象的です。

探鳥会は午前10時から始まりましたが、この空高き青空はマガンにとって、絶好の渡り日和でした。

「これから舞い降りて来るマガンはカムチャツカ半島から一気に渡って来たものと思ってください」(牛山さん)とのこと。とても印象的なレクチャーでしたが、果たして高い空にVの字になって十数羽のマガンがやって来ました。一気に降りることなく、この場所を確かめるように何度も上空を旋回して着水しました。周囲から「ああ、こうやって来るんだね」と、感嘆の声が漏れました。北方からやって来た瞬間を目撃したかと思うと、感慨深いものがありました。

千を超えるようなマガンの群れが一斉に飛び立つシーンに歓声が上がりました。飛来したオジロワシを警戒したようです。そういえば、探鳥会開始前にはオオタカの若鳥も対岸の立ち木に止まっていた。わずか30haほどの小さな沼ですが、なんとも豊かな命の営みに満ちていました。



V字飛行で上空を旋回するマガン 筆者撮影

【記録された鳥】ヒシクイ、マガン、ヨシガモ、ヒドリガモ、マガモ、カルガモ、ハシビロガモ、オナガガモ、コガモ、ホシハジロ、キンクロハジロ、スズガモ、ミコアイサ、カイツブリ、カンムリカイツブリ、キジバト、アオサギ、ダイサギ、クイナ、バン、オオバン、トビ、オジロワシ、アカゲラ、モズ、カケス、ハシボソガラス、ハシブトガラ、シジュウカラ、ヒバリ、メジロ、スズメ、ハクセキレイ、カワラヒワ、ホオジロ、アオジ 以上36種

【参加者】石塚 肇・鈴子、今村三枝子、臼田 正、大垣創、北山政人、國本昌秀、栗林宏三、小塚郁子、小林 恵、小林由尚・麻希・蒼都・ことは、佐藤ひろみ、田原哲也・美幸、辻 雅司・方子、富川 徹、中田勝義、中村明子、畑 正輔、浜野チエ子、早坂泰夫、深津修一、本間康裕、武藤幹太・大翔、山田恵美子、吉田慶子 以上31名

【担当幹事】北山政人、佐藤ひろみ

い し か り 調 整 池

2023.10.1

開始早々、この時期・この場所では珍しい渡り途中のハチクマの幼鳥が上空に現れました。シギはツルシギ、コアオアシシギ、アオアシシギ、トウネン、オジロトウネンの5種を確認しました。

オジロトウネンは1羽の単独行動でしたが、トウネンとの識別について、熱心に観察が行われました。コガモの群れが飛翔し、ノスリやミサゴも高い空に舞っていました。途中で雨が降り始め、30分ほど早めに鳥合わせを行って散会しました。



オジロトウネン 辰巳研一さん撮影



コアオアシシギ 辻 雅司さん撮影

【記録された鳥】オナガガモ、コガモ、キジバト、アオサギ、ダイサギ、チュウサギ、コサギ、バン、ツルシギ、コアオアシシギ、アオアシシギ、トウネン、オジロトウネン、ミサゴ、ハチクマ、トビ、ノスリ、モズ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヒバリ、ショウドウツバメ、ムクドリ、ハクセキレイ、カワラヒワ

以上28種

【参加者】今村三枝子、臼田 正、内山英晋、大表順子、大場みほ、大場芽吹、川端 純、北山政人、國本昌秀、栗林宏三、小坂健介・由佳・優馬・結穂、小林麻希・蒼都、小谷内久江、齊藤 桂・蓮、齊藤潤太郎・律子、佐藤直記・博子、佐野純子、杉山次郎、関根良助・静子、高橋洋子、辰巳研一、田原哲也・美幸、辻 雅司・方子、中田勝義、畑 正輔、浜野チエ子、早坂泰夫、原 美保、樋口孝城、平澤路生、藤田 潔、丸勢文現・亜希子、道川富美子、吉田慶子

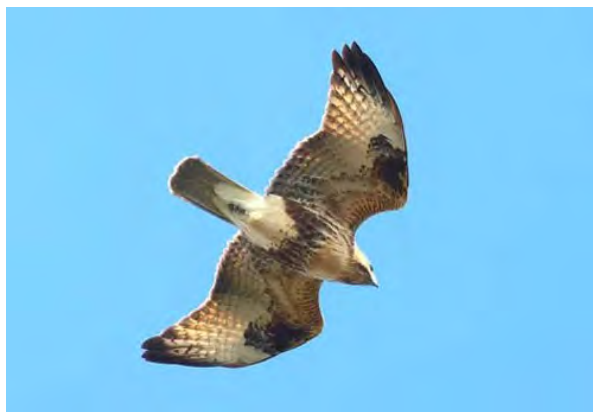
以上45名

【担当幹事】北山政人、樋口孝城、

測 量 山 唐 松 平

2023.10.15

札幌市豊平区 岩崎 俊



ノスリ 北山政人さん撮影

秋は室蘭でタカ類の渡りが見られると聞き、札幌から参りました。せっかく観察するのなら、ただ見るだけでなくどの種が飛んでいるのかを知りたいと思っておりましたので、ちょうど開催されていた北海道野鳥愛護会の探鳥会に参加させていただいたのは幸運でした。

今回が初めてだったのにもかかわらず、参加されている皆様には親切にさせていただけて、観察だけでなく会話も楽しめました。

タカ類の渡りの観察には晴天が不可欠とのことでしたが、幸い当日は好天に恵まれ、爽やかな風の吹く中、ノスリやオオタカなど多くのタカ類を観察できました。

担当幹事さんなどから見えた鳥について教えていただいたのですが、同じ種であっても腹部の色味が違ったり、模様が違ったりと、個体ごとに結構特徴が異なるものなのですね。それも関係して、長年見続けていても双眼鏡だけで見分けるのは難しいとおっしゃっていたのが印象的でした。

1時間半の探鳥会の間に、普段私があまり見かける機会のないタカを何個体も、それも長い時間観察でき、写真を撮ることもできました。

私が持ってきたカメラはそれほど望遠のレンズではなく、撮り慣れてもいないのでボヤけたものばかりでしたが、それでもたまに写り良く撮れるとうれしいものですね。タカ類の渡りは運よく条件がそろわないと見られないとうかがったのですが、また渡りの時期には根気強く通いたいなと思えるほど、とても充実した時間を過ごしました。

探鳥会の終わりには、タカ類の他にもどのような鳥がいたのかを「鳥合わせ」で、教えていただけました。全部で水鳥や小鳥も含めて32種です。同じ場所でも、こんなにも多くの種類の鳥たちが近くに訪れるのですね。今回は空を飛ぶ鳥に注目していましたが、今度は森の中や川辺、湖などにいる鳥たちを観察するべく、ぜひ他の探鳥会にも参加させていただければと思います。楽しい探鳥会を開催してください、ありがとうございました。



オオタカ 北山政人さん撮影

【記録された鳥】ヒドリガモ、スズガモ、ウミウ、ウミネコ、オオセグロカモメ、トビ、ツミ、ハイタカ、オオタカ、ノスリ、ヤマゲラ、ハヤブサ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、キクイタダキ、ヤマガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヒバリ、ヒヨドリ、ウグイス、メジロ、ゴジュウカラ、クロツグミ、マミチャジナイ、シロハラ、ツグミ、カワラヒワ、イスカ、ウソ、シメ、イカル 以上32種

【参加者】飯泉真菜、井上 碧、岩井幸子、岩崎 俊、白田 正、北山政人、近藤章子、齊藤潤太郎・律子、佐藤香織、佐藤有佳里、先崎愛子、田原哲也・美幸、田守真一・敦子、辻 雅司・方子、土田敏子、鳥谷峰 修・心、畑 正輔、早坂泰夫、南 貴和子、本杉政司・朋子、吉見紫乃

以上27名

【担当幹事】白田 正、北山政人



空を見上げて鷹渡りを探鳥 室蘭・測量山



むくげ 庭の木槿

ヒヨドリ4羽巣立つ

札幌市南区 大和谷 正人



巣立ったヒヨドリ 2023.7.19

6月20日頃、窓から170cm離れた庭の木槿にヒヨドリが枝や樹皮を運び始め、22日に木股が支える高さ120cmの場所に右下がりの楕円形の巣が完成した。

6月24日午前4時過ぎ、手鏡で第1卵を確認。25日、26日、27日と、1日1個ずつ増えた。カラスとかアオダイショウの餌食になるのではないかと、でも人が何かして親鳥の放棄を誘っては元も子もないし、窓越しに変化がないことを見ては安堵する日々だった。

6月30日小雨、7月1日大雨。親鳥は巣に被さり、時には首を前に傾けて雨水を防いで座っていた。7月9日、抱卵13日目。親鳥は巣に浅く座っている。そこにヒナ2羽の赤オレンジ色の口先を確認した。それも束の間、もう1本の木槿から様子を伺う若いカラス。妻が大声を出した。“何も手を出さずにあるがままに”の方針を転換、巣の周辺にカラス除けの洋服などをぶら下げた。

7月13日、孵化4日目。ヒナの「餌くれ」アピールが熾烈。大忙しの両親、でも巣に直行せず、ベランダの手すりに止まる。このとき餌が見える。妻は「そうなの、頑張っているの」と声をかけていた。7月17日、孵化8日目。羽繕いや羽ばたき練習。4つの黒い体で巣は満杯、こぼれ落ちそう。

7月19日、孵化10日目。ヒナ4羽が無事に巣立つ。車庫出入り口のステー棒に止まった1羽だけ写真が撮れて、お別れができた。

【会員一筆】写真1枚、600字以内でdayoriaigo@gmail.comまでお寄せください。



【野幌森林公園】

2024年1月7日(日)、2月4日(日)

冬コースでカラ類やキツツキ類に加えて、レンジャク類、ツグミ、アトリ、シメ、マヒワなどの冬鳥を観察します。エナガ、キクイタダキ、フクロウ、クマゲラに出会

えるかもしれません。正午頃に大沢口に戻り、鳥合わせをして解散となります。

集 合：野幌森林公園大沢口 9:00

交 通：JRバス 新札幌発 (文京台循環線)
「文京台南町」下車 徒歩10分

【小樽港】2024年1月21日(日)

札幌から貸し切りバスを利用して、日和山灯台付近、祝津漁港、高島漁港などを回り、海ガモ類、カモメ類、ウミガラス類などを観察します。昼食は各自持参で、小樽運河倉庫プラザ内でとります。

集 合：札幌駅東口「四季菜館前」8:00

または小樽駅 9:20

帰 着：14:40頃 小樽駅 16:00頃 札幌駅

定 員：45名

参加費：3,000円 (当日受付時にお支払いください)

申込先：畑 幹事 1月5日(金)から8日(月)の
9:00~20:00まで電話・メールで受け付け。
(乗降場所を指定してください。メールは電話番号を明記。定員になり次第、締め切ります)

- ・電話 011-894-0017
- ・携帯電話 090-3117-4261
- ・E-mail: hata2002@lapis.plala.or.jp

【円山公園】2024年3月3日(日)

春間近の円山公園で、キツツキ類、カラ類に加え、ツグミ、マヒワ、ウソ、シメなどを観察します。正午頃にパークセンター前に戻り、鳥合わせをして解散となります。

集 合：円山公園パークセンター前 午前9時

交 通：地下鉄東西線円山駅下車 徒歩5分

【ウトナイ湖】2024年3月17日(日)

北の繁殖地に渡っていく、ガン・カモ類やオジロワシ、オオワシなどを観察します。湖畔をネイチャーセン

ターまで歩きます。正午頃にネイチャーセンターの駐車場で鳥合わせをして解散となります。

集 合：ウトナイ湖野生鳥獣保護センター前 9:30

交 通：道南バス 新千歳空港発 (苫小牧行)

「ウトナイ湖」下車 徒歩5分

☆防寒具、雨具、観察用具筆記用具などお持ちください。
☆悪天候で中止の場合があります。

☆問い合わせ 北海道自然保護協会 011-876-8546
10:00~16:00 (土日、祝祭日を除く)

鳥 民 だ よ り

◆2024年新年講演会・写真映写会◆

- ・日 時 2024年1月13日(土) 13:30~16:00
- ・場 所 かでる2・7 520研修室
札幌市中央区北2条西7丁目
- ・参加費 500円 (当日受付時にお支払いください)
- ・講 師 富川 徹氏 (北海道野鳥愛護会副会長・日本鳥類標識協会)
- ・題 名 宮島沼の鳥たちの渡りを語る
～鳥類標識調査の結果から～
- ・内 容 宮島沼にはマガンなどの水鳥だけでなく多くの陸の鳥たちが渡って来ます。2009年からの鳥類標識調査の成果を通じて、小鳥を中心に「どんな鳥がどこから来てどこへ渡っているのか？」など、分かってきたことを紹介します。また、これまで宮島沼で記録された鳥たちについても触れてみます。
- ・野鳥写真映写会 (講演会終了後、15:00頃から)
発表者募集中：お問い合わせは辻 幹事まで
E-mail: mtsuji@eagle.ocn.ne.jp
(発表者は、当日、記録されたUSBメモリ・SDカードなどの媒体を持参してください)

【新しく会員になられた方々】

深津 修一 (札幌市豊平区)

恒本 英子 (札幌市東区)

池田 亨嘉 (帯広市)

表紙の鳥

オオルリの若鳥



ゴールデンウィークのころ、札幌市北区にある自宅近くの公園にオオルリが立ち寄ります。例年は1日~2日の滞在ですが、今年は何日も近くで見ることができ、当たり年でした。

そして9月29日のことです。コサメビタキを探していたら、尾の青い鳥を発見。今年生まれと思われる若いオオルリでした。この時期に、ここで会えるとはびっくりで、感激でした。これから東南アジアの方面に旅立つのでしょうか。無事に越冬して、また来春に近所の公園に戻ってきてほしいものです。

辰巳 研一 (札幌市北区)

【北海道野鳥愛護会】 年会費 個人 2,000円、家族 3,000円 (会計年度4月より)

郵便振替 02710-5-18287

〒003-0026 札幌市白石区本通1丁目南2-38 北海道自然保護協会気付 北海道野鳥愛護会 ☎ (011) 876-8546

HPのアドレス <https://aigokai.org>